

に過ぎざるべきは疑無けれども、舊唐書が茲に突如として當代の史書に殆ど用ゐられざる康居の名を現はせること既に怪しむ可きに、此の際烏介可汗が遠く往昔康居と稱せられたる地方に赴き、之に依らんとしたりとするは、當時の事情に通ずるものゝ到底信じ得ざる所なりとす、されば余輩は長く此の記事に關して疑問を有せしが、通鑑會昌三年正月庚戌の條の註記を見るに及びて、始めて之を解くを得たり、即ち註記は此の一節を抄出し、其の末に考を附して

蓋以李德裕紀聖功碑云、烏介并丁令以圖安、依康居而求活、盡徙餘種、屈意黑車、彼所謂康居、用郵支故事耳、致此誤也

と曰へり、實に舊唐書の謬因を抉出して餘す無きものなりとす

烏介可汗が敗餘の身を室韋の一部なる黑車子に投じたる所以に就きて考ふるに、當時回鶻の北に當りては黠戛斯の勢力あり、會昌二年十月には、將軍踏布合祖等を遣して天德軍に至らしめ、先きに使を出して太和公主を護送せしめしに、聲聞無きを述べ、「今出兵求索、上天入地、期於必得」と曰ひ、又既に安西・北庭・韃靼等の五部落を得たることを述べたることあり、而して後に述ぶるが如く、其の勢は益々南に加はり、遂に唐に結びて回鶻を攻めんとするに至りたるものなれば、此の時回鶻が逃遁の途を北方に取る能はざりしは固より當然のことなれども、然も特に東北室韋部を撰びて之に依らんとしたるは、蓋し又別の理由無くんばあらず。

抑も此の頃に至る迄の室韋と回鶻との關係に就きては、史書の記する所極めて乏しく、従つて本篇に於ても之に